

章炳麟の經學に關する思想史的考察

——春秋學を中心として——

末岡 宏

一はじめに

章炳麟（一八六八年～一九三六年）は清末民國初にかけて生きた、思想家として、また魯迅が最後まで師と仰いだ人物としても知られている。章炳麟の思想についてはこれまで、民報の主筆として民族主義革命をささえた革命家としての政治思想や、あるいは佛教や莊子の思想を中心とするその獨特の哲學に關して、國內外の多くの研究者の手によって様々の角度から研究されている。

ところで章炳麟は日本に亡命中、魯迅らの留學生に對して説文解字を講義したという點からも知られるように、經學者でもあった。また章炳麟は晩年には國學大師として知られた。章炳麟は若い時には、阮元が始めた清朝の考證學の傳統を繼ぐ詁經精舍で、清末の大儒俞樾のもとで學んでいる。その後、一度は康有爲の變法に賛成したが、やがて康有爲の立憲君主主義の政治主張と訣別し、民族主義革命を主張して民報の主筆となった。晩年は中華民國政府と一定の距離を保ち、蘇州で國學を弟子に教えることで晩年を過ごした。

從來の章炳麟の經學の研究は、政治的に敵對する變法派を支える公羊學派との對比において、政治思想とのかかわりから論じられること

がほとんどで、經學史の上から詳しく論じられたことはほとんどなかった。論じているものについても清代の考證學・漢學の一つのパリエーションとしてしかとらえられてこなかった。しかしながら章炳麟の經學は經學史の上から見ても獨特のものであって、經學史上重要な位置にあると考えられ、さらにまた章炳麟のユニークな思想の出發點として考えなければならぬものである。また從來清末今文學派についてはその主張が研究されているが、古文派についてはその具體的な主張について詳細な研究は進んでいない。そこで本稿では、まず章炳麟の古文學としての春秋學の特徴を考察し、次にそれが經學史上のどのような位置にあるかを考察したい。

ところで、章炳麟の經學を考察する前に、まず當時の經學の狀況を簡単に見ておこう。清朝の經學は一名を漢學と呼ばれることでもわかるように、孔子の述べた内容を理解するためにまず漢代の經學者の訓詁を研究することをその主な手段とするものであった。そのために、校勘學・音韻學等が驅使され、その實證的な方法から考證學とも呼ばれる。章炳麟の生きた當時はその清代の漢學の最も盛んであった乾嘉時代は過ぎたものの、さらに精密な文獻批判等によってその成果が集大成され、その影響が諸子學にまで及んだ時代であった。

また先ほど述べたように、當時の經學を語る際には康有爲を中心とする公羊學派を無視することはできない。公羊學派は、孔廣森らの『公羊傳』に對する實證的な研究に始まったが、劉逢祿は『左氏春秋考證』で『左氏傳』を劉歆の偽作だとして『左氏傳』の信憑性を疑った。そのことから『左氏傳』を黨派主義的に否定し、孔子の教えは『公羊傳』にのみ傳えられていると考える常州今文學派（公羊學派）となった。そして常州今文學派の主張は康有爲に至って、主に何休の公羊學に依據して大同思想を裏付けるものとなっていた。その康有爲は『新學偽經考』において、種々の文獻を使って古文の經書はすべて劉歆の偽作であり、今文經だけが經書として信頼するに足るものであること、そして『孔子改制考』で、經とは從來考えられていたように周公ら聖人が作ったものを孔子が祖述したものではなく、すべて孔子自らが聖人に假託して作り上げたものだとした。章炳麟自身が「先師俞君、曩日談論の暇、頗る公羊に右せり。」と述べるように詁經精舍における彼の師俞樾もまた、著作には著わさないが暗に今文學派を支持していた。それに對して章炳麟は「余經を治むるに専ら古文を尙とび、獨り齊・魯のみに非ず、景伯・康成と雖も亦た阿好する能はざるなり。」と、當時の風潮に抗して古文を主張し、さらに清代の漢學で重視された賈逵・鄭玄すらも批判している。このような、當時としてはかなり異色な學說を持っていた章炳麟の經學を、主に春秋學によりながら明らかにしていこうとするが本稿の目的である。

二 章炳麟の春秋學

では章炳麟の經學について考えてみることにしよう。章炳麟の著作の中でその中心を成すのは小學と春秋學である。小學については『新

方言』『文始』等多くの專著があり、また『國故論衡』の第一卷、國學講演録の冒頭に置かれる等、章炳麟の經學の一つの大きな柱であり、章炳麟が重要視していたことがわかる。しかし小學については、章炳麟自身「學者經を治むるを志す有るに、故訓を明らかにせざるべからず。」と言うように、經學の基礎と考えていて、自分の思想的立場を直接表現するものとは考えていない。またその中には音韻説のように注目すべき説もあるが、それは主に中國語學史の上で論ずるべき問題であり、思想の特徴を考察するには適當とは言えない。そこで本稿ではまず、章炳麟の經學のもう一つの柱であり、當時の主流であった今文學との關係を考える上で重要な春秋學を取り上げたいと思う。まず章炳麟の春秋學に現れた章炳麟の經に關する獨特の考え方を考察し、その上で章炳麟の經學の特徴を明らかにしていきたい。

1 『春秋左氏疑義答問』に見られる章炳麟の説について

章炳麟の春秋學は、その一生のうちで大きく變化している。その變化を考察することで章炳麟の春秋學の特徴及び章炳麟が經學の上で何を重要なものだと考えていたかが分かるので、以下考察していきたい。

さて章炳麟は『自述學術次第』で『春秋』に關する自説の變化について次のように述べている。

余初め『左氏』を治め、漢師を偏重し、亦た公羊を頗か傍采す。

以爲らく元凱拘滯するは、劉賈の閎通するに如かずと。數年以來、釋例は必ず杜氏に係り、古字古言は則ち漢師を尙ぶを知る。

つまりここで章炳麟は自分の『春秋』に關する學說が變化したこと、そしてその變化とは、最初は漢儒の説をとっていたのに對して、後に

は杜預の釋例に依るようになった點にあると述べているのである。そしてまた『漢學論』では

余少き時左氏春秋を治め、頗る劉・賈・許・穎を主として以て杜氏を排し、卒に婁しば攻伐を施すも、杜の守猶ほ完にして、劉・賈・許・穎を爲むる者自ら敗る。晩歲『春秋疑義答問』を爲り、頗る杜氏に右し、經義に於て始めて條達せり。

と、變化した後の代表的著作は『春秋左氏疑義答問』であると述べている。

ところで、この後期の春秋學は、漢學を尊んだ清朝の學問の中で、晉人の杜預の説を重要視するという點で、異彩を放っている。つまり、章炳麟の春秋學の獨自性が現れていると考えられるので、本稿では『春秋左氏疑義答問』にみられる章炳麟の春秋學の特徴を考察し、次にこれを初期の代表作である『春秋左傳讀』と比較しながら考察してみたいと思う。

ではまず『春秋』や『左氏傳』について章炳麟は具體的にはどのように考へていたかについて考察したいと思う。

章炳麟の弟子黃侃は『春秋左氏疑義答問』の後跋で、この書で説かれる章炳麟の説をまとめて次のように言っている。

孔子春秋を作る。魯史の舊文に因りて治定する所有り。其の治定未だ盡くさざる者は、専ら丘明に付し、之が傳を作らしむ。傳撰するに丘明よりすと雖も、而れども傳を作るの旨悉くとも孔子に本づく。公の書の説明する所の者、梗概此の如し。舊史に因るの説を知らずんば、則ち直だ春秋を以て素王の書と爲し、之を責むるに熾悉にして曩疑起る。孔子治定する所有るを知らずんば、則ち春秋孔子の筆刻を経ず、純ら魯史の原文を録すと云ひて、而

して經を修むるの意浪む。傳を作るの旨悉くとも孔子に本づくを知らずんば、則ち經の本事と褒諱挹損の文辭の時君に屈せられて申ぶるを得ざる者と違ひ、竟に匡救證明するの道無し。その弊や、傳を執れば則ち經を疑ひ、傳を廢つれば而ち經義彌いよ晦し。

以上をまとめると次の二つの見解が示されている。第一に孔子が『春秋』を作るにあたっては、魯史の舊文（つまり魯の春秋）をもととして、それを修訂した、とする見解である。ただし、ここで黃侃は直接は述べていないが「魯史の舊文に因りて治定する」とは、孔子が周の宣王の史官の法に従つて、亂れていた魯史の舊文を、本來あるべき姿に戻したことだとする。つまり『春秋』の修經は孔子が獨自の判斷によつて事件を評價したのではなく、周の史官の筆法つまり凡例にあらうように直したということに過ぎない。

第二に、傳に述べられている内容は、孔子が魯史である『春秋』では判らない點を左丘明に解説させようとしたものだとする。

そして、『春秋』に關して弊害をもたらす誤った考へを三つ擧げて否定している。それは、まず、『春秋』は孔子の創作だとする説、これは今文派を指すのだろう。次に、『春秋』の經に關して孔子の關與を全く否定する説、これは疑古派の説や章學誠の六經皆史説を指すのだろう。最後に、『左氏傳』は『春秋』を説明したものであつて、孔子の意圖が述べられていることが認められないとする説、これは從來からの『左氏傳』に關する見解である。

ここで黃侃は章炳麟の春秋學の特徴を端的にまとめているが、『春秋左氏疑義答問』の文を検討することで、更に詳細に章炳麟の説を検討してみよう。第一の孔子が魯史の舊文によつて治定したという點についてだが、この點について考察する前に章炳麟が史官あるいは歴史

書というものをどのように考えていたかについて考察してみよう。
『春秋左氏傳義答問』卷一で章炳麟は、まず『春秋』を紀年の書、つまり年代を記した書物と定義している。この點は杜預の『春秋經傳集解序』の「史の記す所は必ず年を表して以て事を首む。」を受けているのだから、『春秋』（歴史書）であるかどうかの基準を年を示すことにあると考えるのは章炳麟獨自の説であらう。これは章炳麟が歴史書を重視することから生じたもので、杜預自身は特別の意味を持たせてはいないだらう。その上で、章炳麟は年代のはっきりした記録が宣王の時代から始まることを説いて、

詩亡ぶるとは、厲王の時「小雅盡ごとく廢れ、四夷交ごも侵し、中國微なる、」を謂ふなり。春秋作こるは、宣王の時を謂ふなり。其の後孔子之を修むるは、要は周室を褒め、方伯を尊び、夷狄を攘け、諸もろの朝會遣使の事に及ぶに在り。略ぼ小雅と同じくして、而して大雅受命の端に及ばず、其の統亦た見るべし。¹³

と、『孟子』離婁篇の文と關連づけながら紀年のある形態をとった歴史書としての「周の春秋」は、詩經の小雅を繼ぐ形ではじまると考える。そして

傳に五十凡と稱する者は、亦た宣王の史の遺す所、書法政度は悉ごとく時制に依る、周公の舊籍に非ざるなり。¹⁴

と『春秋』の義例は、周の宣王の時代の史官によって定められたものだとする。この義例を宣王の史官の法とする點は、杜預が凡例を周公の遺制とすることは異なっており、章炳麟獨自の考えである。

後で詳説するが、章炳麟は經書はすべて記録であると考えており、その記録という點から詩經との連續性を主張するのである。

ところで、史官は周の王室にだけに在ったのではなく、「周室春秋

有りて、其の法式を布くと雖も、侯國殊絶すれば、同時に薈録する能はず。」と、各國の記録が諸侯の報告によるしかないのので、各國にも史官が派遣された。その各國の史官は、自分が赴任している國の記録を作るようになった。これが「百國春秋」である。ただし「列國の史官は、皆周の太史の陪屬に出でて、其の國に於て純臣爲らず。」と自分が赴任している國の官僚體制から獨立して、周の朝廷の史官（太史に直屬して、單に赴任している國の歴史を記すだけではなく、その記録を周の太史（史官）に届けることもその役目の一つであった。

つまり各國の史官はその國とは獨立した存在であつて、史官には獨自の記録法があつたのである。この點に關して杜預は各國に史官がいたことは述べているが、史官を周直屬の官とすかどうかについては觸れていない。この各國の史官を、その國から獨立したものと評價するのは章炳麟獨自のものである。

次に實際の『春秋』がどのように成立したかであるが、章炳麟は孔子の時點で存在した魯の國の記録「魯史の舊文」と『春秋』つまり「魯史」とを區別して考える。他の諸侯の國と同じように魯にももちろん史官がいたわけだが、その記録が「魯の春秋」である。ところが世が亂れて周の政治制度もなかなか實行されなくなった。それにとりなつて史官の獨立性も失われ、その記録つまり「魯の春秋」もまた時の權力者に遠慮する等、政治の影響を受けて史官の法からかけ離れたものとなった。これが「魯史の舊文」である。だから、「魯史の舊文」は事實を正しく傳えるものではなくなった。そこで史官の法が分かれば事實はつきり分かるというわけにはいかなかったのである。この事態を改めるために、孔子が魯史の舊文を修訂したと述べてある。つまり章炳麟によれば孔子の行った作業は『春秋』（魯の春秋）

を宣王の史官の法に則った魯史本來のあるべき姿に戻したのであって、自分の考えを表現したのではないのである。『自述治學』で「春秋は本より魯史に據り、孔子述べて作らず、倘い^あは亦た未だ一字を加へず^あ。」と言うように、『春秋』の本文に對する孔子の改變を認めないのである。この點は杜預が孔子の變例を考えて、そこに孔子の教えを讀みとろうとするのとは異なる。

ただし孔子が「魯の春秋」を本來の形に戻すには、歴史上の事件がどのようなかを知らねばならないが、そのためには周の太史の所に保存されている記録を参照する以外に、事實を確かめるすべがない。孔子自身は正式な史官ではないから、周の太史の記録を見るわけにはいかない。そこで重要な働きをするのが魯の史官であつた左丘明である。つまり孔子は左丘明と共に周の史官の歴史書を見ることによつてはじめて歴史上の事件の事實を知つたとする。この根據となるのは『左傳正義』に引く「嚴氏春秋」の中に引用される「觀周篇」の次の句である。

沈氏『嚴氏春秋』『觀周篇』を引きて云ふ、「孔子將に春秋を脩めんとして、左丘明と乘りて周に如き、書を周史に觀、歸りて春秋の經を脩め、丘明之が傳を爲り、共に相表裏を爲す^あ。」と。

この句を章炳麟は解釋して次のように言っている。
此れ則ち春秋の經傳共に作られ俱に修めらる、語『觀周』に見ゆ^あ。

つまり『春秋』は魯の國の歴史書であるから、いかに魯史のあるべき姿に戻したとしても魯の國に關係ないことは書かないし、また魯の國に都合の悪いことは書かないという一諸侯の國の歴史書としての限界がある。そして章炳麟の立場からすれば、宣王の史官の法を曲げるこ

とは許されない。ところがそれでは歴史上の事實を明らかにできない。そこで、章炳麟は次のように説明する。

是の故に其の舊文を經に存し、而して其の實事を丘明に付して以て傳を爲らしめ、錯ごも行はれ代ごも明らかに、官法と事狀とをして相ひ害せざらしむ。所謂經傳表裏するといふ者は此れなり^あ。つまり經はあくまでも魯史のあるべき姿に戻したものだとし、傳は周の史官のもとに集められた各國の歴史書の記事によつて事實を明らかにすることによつて補正したものだと考える。ここで左丘明の役割は極めて大きなものになる。つまり孔子に代つて事實を明らかにする共同作業者として位置付けられているのである。

この點は從來『左氏傳』を信じるものは『史記』十二諸侯年表序の、「魯の君子左丘明、弟子人人端を異にし、各おの其の意に安んじ、其の眞を失ふを懼る。故に孔子の史記に因りて、具に其の語を論じ、左氏春秋を成す^あ。」という記事により、左丘明は孔子から直接春秋について教わつたが、後に孔子の弟子たちが意見を殊にするようになったので、孔子の眞意を明らかにするために『左氏傳』を作つたと考えていた。その場合、左丘明は孔子の眞意を傳えるために、孔子の教えを代辯したにすぎない。しかし章炳麟の考えによれば、孔子が周の歴史書（つまり周の春秋）を見に行く案内をすることで『春秋』の成立に決定的な役割を果たし、また孔子の意を受けて傳を作つた共同制作者の役割を左丘明は擔つているのである。さらに『春秋』の中で、孔子が手がけたはずのない哀公の經の部分は孔子が修訂したのではなく左丘明が修訂したとするのである。つまりこと『春秋』に關する限り、左丘明は孔子と同等あるいはそれ以上の役割を果たしていることになる。

ただしここで注意しなければならないのは『左氏傳』はあくまで、『周の春秋』の記事を轉載することを経に述べられた事柄を説明しているに過ぎないのであって、自分の意見を述べているのではない。つまりここでは孔子と左丘明はあくまでも周の歴史をより正確に保存しようとする祖述者でしかないのである。この孔子が『春秋』を本来の姿に戻したただけとする説は、章炳麟獨特のものであるが、從來からの問題點を解決する次のような利點を持っている。杜預が、『春秋』に「凡そ」と書いてある義例だけを凡例とし、それ以外の義例を變例と見る點は、後述する劉師培との書簡の中で二人の意見が一致していたように、從來から春秋學者の間で疑問が抱かれていた點である。この點は清代の漢學者が杜預の釋例を認めず、漢儒の義例說の研究に走らせた一因ともなっている。しかし孔子の變例を認めないと、『春秋』の一字褒貶に示された判斷の基準すべて、周公か孔子のどちらか一人だけで決めたことになる。周公によるとすれば、「孔子春秋を成して、亂臣賊子懼る」ということが説明できなくなるし、孔子によるとすれば「述べて作らず」の原則からはずれてしまう。ところが、この章炳麟の説であれば孔子は一切自分の思想を表現しなくても亂臣賊子を恐れさせることができるように問題を回避できる。

以上考察してきたことを列挙してみると次のようになる。一、『春秋』とは年代を記した歴史記録である。二、『春秋』は詩經小雅を受け繼ぐ形で、宣王の時代に始まった。いわゆる義例はこの時代の史官が定めたものである。三、史官は各國にも派遣され各諸侯の國の記録を制作した。四、孔子は魯史の舊文を事實を正しく傳える『春秋』本来の形に戻すように『春秋』を治定した。その際に孔子自身の思想は『春秋』に表現されていない。五、左丘明は魯の太史であって、孔子

が『春秋』を治定する手助けをしたのみならず、孔子の意を受けてより正確な事實を傳えるために『左氏傳』を制作し、また『春秋』の一部も作った。

以上見てきたように、章炳麟は杜預の釋例をとったとは言いがたが、『春秋』あるいは『左氏傳』をどうとらえるかという點については、全く杜預とは見解が異なっている。確かに章炳麟は『春秋左氏疑義答問』の他の個所で杜預の釋例を用いて『春秋左氏傳』を解釋するのだが、釋例の位置づけ自體は杜預とは異なっている。つまり章炳麟は、杜預からその義例說を受け繼いでいるが、その根據となるべき經に對する考え方が異なっているのである。特に獨特なのは、孔子に一字褒貶の判斷も認めず魯史の舊文に戻したただけとする點と、左丘明を孔子と同等に近い地位に評價している點である。だとすれば、章炳麟がどうして杜預の説を受け入れるに至ったか、それを章炳麟の説の變化を考察することで探ってみよう。

2 『春秋左傳讀』と章炳麟の説の變化

前章で考察したような章炳麟の説はどのようにして成立したのであるうか。その變化の過程を考察してみよう。章炳麟の初期の著作の中に、『春秋左傳讀』がある。これは章炳麟自身後に自分の意にそわなくなつて公刊しなかったが、章炳麟の初期の『春秋』に對する考えを知る上では重要なものである。この『春秋左傳讀』と『春秋左氏疑義答問』を比べてみると、章炳麟の説がどのように變化したかがわかる。まず全體的に見てみると、兩書に共通する話題がほとんどないことに氣がつく。つまり書物の性格がかなり異なっているのである。『春秋左傳讀』では、専らその記述は名物訓詁の説明にその主眼がお

かれ、經全體の性格あるいは義例に關する考察が少ない。それに對して、『春秋左氏疑義答問』は義例によつて『春秋』及び『左氏傳』の記述を説明している。この點に、章炳麟の關心の對象の變化を窺うことができるが、それよりまず『春秋左傳讀』の中にも『春秋』自體の性格について觸れているところがあるので、それを『春秋左氏疑義答問』と比べながら考察してみよう。

『春秋左傳讀』で見られる『春秋』に對する説明で氣がつくのは基本的に『公羊傳』と『左氏傳』が同じ義を説いていると考えることである。その『春秋』の義とは、孔子素王改制説である。まず「立素王之法」では、賈逵の『春秋序』・賈誼の『過秦論』・董仲舒の『對策』・『莊子』天道篇を引いて『春秋』とは素王の法を立てたものだとしている。また「公羊以隱公爲受命王」では、『公羊傳』が隱公を受命の王だとして、「周を黜け魯を王とす」の説に贊同し「春秋の改制、孔子已に親から之を行ふ」と、孔子改制説を主張している。この素王とは孔子が帝位についてはいないが古の聖王の後を繼ぐ王であつたことを指す、主として公羊學派の使う用語である。つまりこの點は、公羊學と同じである。その根據となるのが賈逵・服虔らの漢代の左傳學者の義例説である。

章炳麟も『春秋左傳讀』で、『公羊傳』『穀梁傳』と『左氏傳』は、その義例説においては矛盾するものではないと考えている。この根據は、賈逵のいわゆる「左氏長義三十事」の

左氏三十事尤も著明なる者を擯出すれば、斯ち皆君臣の正義、父子の紀綱なり。其餘の公羊と同じき者は什に七八有り。²⁴
である。これは章炳麟獨自の考え方ではなく、章炳麟と同時代の經學者である劉師培等もこの賈逵の説を引いて『左氏傳』と『公羊傳』

『穀梁傳』が同じ義例であると主張している。しかし、『春秋左氏疑義答問』では

公羊又た其の後に在り、其の作る所の傳は、大事の左氏に同じき者什に一二有り、其餘は則ち異なる。義例は乃ち盡く同じからず。正に鐔椒の采摭盡きざるを以て、故に傳するに二家の口説を以てするなり。²⁵

と、『公羊傳』『穀梁傳』の義例は『左氏傳』と異なるとする。それは、「十二侯年表」の記事にある楚の鐔椒の『左氏傳』の抄録『鐔子微』を公羊や穀梁が誤解して傳えたものだと言炳麟は考へるのである。また素王改制説についても、「素王の改制は、彼の傳、本と明文無し、特だ仲舒の輩傳會して之を成す。」と素王改制説を公羊家の誤った説だとしている。このように、『春秋左傳讀』と『春秋左傳疑義答問』では、考へは全く異なっている。

この賈逵の説を信じなくなつたことについて章炳麟は『春秋左氏疑義答問』で次のように言っている。

今左氏の凡例と諸もろの書法とを尋ぬるに、絶はだ公羊に異なるも、而れども『同じき者什に七八有り、』と言ふは、蓋し劉賈諸公其の道を通ぜんと欲して、辭を以て比傳せざるを得ず。作る所の條例、遂に支離多し。杜氏は古字古言に於て、漢師に遠ばざることを甚だ遠し。獨り其の『經の條實は必ず傳より出づ。傳の義例は總べて諸もろの凡に歸す。變例を推して以てて褒貶を正し、二傳を簡びて而して異端を去る、』と謂ふは、實に劉・賈・許・穎の逮ぶ所に非ざるなり。²⁶

つまり漢儒は『春秋』三傳の義例が同じであらうという前提に立つて、『公羊傳』『穀梁傳』の義例を『左氏傳』に當てはめようとした。

ところが實際には『公羊傳』『穀梁傳』の義例は『左氏傳』にはなかなか當てはまらない。ところが杜預の釋例は『左氏傳』の傳文から歸納したものであるから『左氏傳』全體に當てはまる。ここで章炳麟は杜預が『左氏傳』の文から歸納的に義例をとらえようとしたそのやり方を評價しているのである。しかし、名物訓詁に關しては杜預は漢代の經學者に遠く及ばないが、それよりも全體の主旨が通っている方が重要だと考えているのである。このことは『春秋左傳疑義答問』が名物訓詁にほとんど觸れないことの説明になる。章炳麟が『春秋』について重要だと評價したのは名物訓詁ではなくて、その義例のとらえ方なのである。

また素王改制說到關しても「昔『劉子政左氏說』を撰し、猶ほ賈の素王立法の義に従ふ、今悉ごとく取らず」と述べている。この素王改制説の否定がどのような過程で起こり、杜預の義例を取ることでどう關係するかを、章炳麟の同時代の經學者劉師培との書簡を見ながら考察してみよう。劉師培は、一時期は章炳麟と同じく革命派に屬し、『春秋左傳舊注疏證』を著した劉文淇を曾祖父として左傳學を家學とした學者である。左傳學を家學としたことでわかるように劉師培もまた、章炳麟と同じく古文派に屬していた。この劉師培と章炳麟が一九〇三年から一九〇七年にかけて『春秋』について議論をした書簡が残っている。同じ古文派だが、二人の意見は異なっている。その相違は次の二點に要約することができる。章炳麟が

後復た侍中奏する所に、「左氏公羊に同じき所の者、什に七八有り」と云ふ有るを紬繹し、乃ち知る、左氏初めて行なはれ、學者其の例を得ず、故に公羊に傳會して、以て其の説を就す。……征南……復た雜へて二傳を引かざれば、則ち後儒の先師より勝れ

る者なり。然らば、是れを以て周公の舊典と爲すは、抑そも又た其の義趣を失へり。其の閒固より史官の成法有り、赴告諸例の如き、是れなり。玆よりして外、大抵素王の新意なり。

と、漢儒の義例説を否定しているが、まだ義例は「素王の新意」だと考えている。それに對して劉師培は、

左傳言ふ所俱に周禮に係り、必ずしも公羊改制の説を以て左傳に附會し、以て其の家法を消へず。賈君春秋左傳序の首に「孔子素王の法を立つ」と言ふは、即ち誤りて二家の説を采るに係る。實は則ち素王の説は、緯書より出づ。

と素王の説を否定し、左傳の義例と公羊の義例は同じものがあつてもよい、と述べている。『丙午與劉光漢書』は一九〇七年に書かれたものであるから、この時點では杜預の釋例をとつてそれを宣王の史官の法と見ているが、なお素王の新意という形で孔子の思想の表現を『春秋』の中に見い出そうとしている。素王という言葉は、前述したようににもともと董仲舒らが使いだした公羊學派に由來する言葉であり、また劉師培が指摘しているように讐に多用される言葉である。康有爲の『孔子改制考』もまた孔子を素王と考えることを基本とする。一八九一年から一八九七年にかけて著わされた『春秋左傳讀』は、一八九七年の『孔子改制考』發表以前のものであるから、漢儒の説を受け繼いで孔子素王説をとるのは當然かも知れない。しかし丙午の年（一九〇七年）は一九〇〇年前後の康有爲との訣別以降であり、杜預は『春秋經傳集解序』で漢儒の孔子素王説を否定しているのであるから、章炳麟が素王の説をとるのは極めて不自然である。

このことから考えると章炳麟の説の變化は單に公羊學を混えることを嫌つただけではないことを示している。康有爲との訣別の後も

孔子が素王であると主張したのは、章炳麟が孔子を素王と表現しないではいられないほど孔子を尊重していたことを示しているのではありませんか。

その素王説が變化した理由は、劉師培が指摘したように素王という語は緯書説に基づいているという缺點があり、また康有爲の説に對抗する論理を發見したからなのである。『春秋左氏疑義答問』で考察したように、孔子は周の文化の繼承者とも言うべき役割を果たしているのであるから、別に素王である必要はないわけであり、素王説を捨て去ることができたのだらう。

つまり、以上考察してきたように、『春秋左傳讀』の説から『春秋左氏疑義答問』への變化は一舉に起こったものではない。また王汎森氏は康有爲の孔教會に對する反發から章炳麟の説が變化したとし『尙書』(重訂本)の「詁孔」篇の成立をその思想的變化の時期としているが、それは當を得ていないようである。事實としては杜預の釋例(あるいは傳文から歸納的に釋例を考える方法)をとるようになったのが時代的には先である。實際に、鎌田正氏が指摘するように漢儒の義例説は『公羊傳』『穀梁傳』の説を混じえ『左氏傳』とあわないことがある。だから『自述學術次第』で「結局何度も攻撃したが、杜預の守備は完全で、劉賈許穎の説を行うものは自然と敗れた」と言うとおりのものであらう。先に指摘したように章炳麟は漢儒の訓詁が杜預よりも勝っていることを認識していた。それでも杜預の説をとったというのは、訓詁よりも義例という經全體の理解の合理性を重んじた姿勢がでているのではなからうか。だからこそ章炳麟自身『春秋左傳讀』の缺點を自覺して刊行しなかったのであらう。おそらくこの自覺は比較的早い時期、詁經精舍を去った時點で生じていたのではないかと思われる。

る。このことに決着をつけたのが『春秋左氏疑義答問』であつた。

以上考察してきた章炳麟の『春秋』に關する考えの大きな特徴は以下の二つである。第一に、孔子が『春秋』を修訂した作業の中に孔子の獨自の思想の表現を全く認めないで、孔子及び左丘明を歴史あるいは廣い意味での文化の保護繼承者として評價している點である。ここには章炳麟が歴史を何より大切だと考えたことも現れている。次に章炳麟はその思考形式において、訓詁の正確さよりも、むしろ義例説の一貫性を重要視するという、經あるいは學問に對する姿勢を示している。

三 章炳麟の經學觀

——六經に對する考え方の考察——

章炳麟は最晩年、國學講習會を開いている。その内容は『小學略說』『經學略說』『史學略說』『文學略說』の四つに分けて、刊行されている。これは『春秋左氏疑義答問』の著作とほぼ同年であり、章炳麟が最後に到達した視點を示している。その中の『經學略說』の内容を検討しながら春秋學の検討で得られた結論と比較してみよう。『經學略說』で、

周代の詩書禮樂は皆官書なり。春秋は史官の掌どる所、易は大卜に藏せられ、亦た官書なり。

と六經はすべて官書であると述べている。『春秋』を宣王の史官の法によるとした『春秋』に關する説とこれは同じである。この六經はすべて周の官の書であるという説は『漢書』藝文志に基づくが、これとほぼ同じ主旨のことは章學誠が六經皆史説として言っている。そして「經」といふ呼び名が、本來一定の大きさの簡牘を指したのだとする。

六經の名、孰か之を定めんか。曰く、孔子のみ、と。孔子の前、詩書禮樂已に備はる。學校の教授は、即ち此の四種なり。孔子人に教ふるに、亦た曰く「詩に興り、禮に立ち、樂に成る、」と。又た曰く「詩書執禮は、皆雅言なり、」と。見るべし、詩書禮樂は、乃ち周代通行の課本なり。春秋に至れば、國史の秘密、公布すべきに非ず。易は卜筮の書爲り、事恒常に異なり、當務の急に非ず。故に均しく以て人に教へず。孔子周易を賞し、春秋を修めてより、然る後に易と春秋と同一に六經に列す。是れを以て六經の名、孔子に定めらるるを知るなり。

つまり孔子は六經を經の名で呼び、教科書として使つて六經を後世に傳えたという點が評價されている。次に今文古文の問題について觸れて言ふ。

漢人經を治むるに、古文・今文二派有り。伏生の時緯書未だ出でず、尙ほ怪誕の言無し。東漢の時に至らば、則ち今文家の緯書に附會する者多し。古文家の歴史を言ひて緯書を信ぜず。史部經に入るは、乃ち古文家の主張なり。緯書經に入るは、則ち今文家の主張なり。古文家の間ま緯書を引くは、則ち純の古文學に非ず、鄭康成一流是れなり。

ここでは漢代の經學の中で東漢に現れた緯書を排斥すべきだとしている。古文家は緯書を信じず史部（歴史）を經にいれようと主張する點で評價されているが、その古文派の中で鄭玄は緯書を使う點で否定されている。このこともまた、六經の傳承を重要視することを示している。緯書を排斥するのは、緯書が東漢になって現れた點で六經や傳に比べて價值がないと考へているからのである。最後に清代の漢學を評價して、

清人經を治むるに、漢學を以て名と爲す。其の實は漢學に古文・今文の別有り。今文を信ずるは則ち非、古文を守るは即ち是なり。三國の時漸やく古文を尊信するを知る。故に魏晉兩代、說經の作、精到なること漢儒に及ばずと雖も、其の大體を論ずるに、實は後前に勝る。故に漢學二字、治經の正軌と爲すに足らず。昔高郵の王氏、其の父を、「漢學の門徑に熟するも、而れども漢學の藩籬に困らず。」と稱す。此れ但だ訓詁に就きて言ふのみ。其の實、事跡を論じ、義理を論ずるに、均しく當に是くの如くなるべし。魏晉の人の說經の作、豈に廢すべけんや。

と、さらに清の漢學を論じて、清代の學者のうちの今文派を否定し、古文派を肯定する。ただし古文派も含めて、清の漢學全體を、訓詁のみに目を向けて經自體の理解に缺けていると批判する。そして魏晉の經學者の、經書全體を見る態度を評價している。章炳麟は小學に關する著書も多く、經學の基礎學としての訓詁學の重要性は否定しているわけではない。しかし清代の漢學者がともすれば訓詁のみにとらわれて、經の説く教えを忘れ去ったかのような姿勢を批判したのである。

つまり、章炳麟はここで六經を周の文化の精髓と考へ、それを評價して後世に傳えた孔子を評價する。史部の書を評價するのにもまた文化を後世に傳えた點を評價するのだらう。逆に緯書を今文經よりも強く否定するのは、おそらくは、東漢に出てきながら六經の教えを阻害する點を考へてのことであらう。そして清朝の漢學の傾向を、六經の義に目を向けられないものとして否定し、むしろ六經に示された義を説く魏晉の學問を高く評價するのである。

四 結 論

『春秋左氏疑義答問』に見られる章炳麟の考えは、『春秋』と『左氏傳』をあくまでも歴史書として見る點に特徴がある。特に『左氏傳』も孔子が直接手をかけていると考える點、『左氏傳』も周の史官の法を傳えたもので、孔子の個人的な思想は入っていないと考える點は、章炳麟獨特のもので、從來はなかった考えである。さらにこの經のとならえ方は六經全體にも當てはまり、章炳麟は六經とは周の文化ひいては中國の文化の精髓であると考へている。そこで孔子が果たした役割は、周の文化の精髓を後世に傳へたことである。從來、經とは聖人が眞理を説いたものと考えられ、孔子もまた眞理を説く聖人の一人であった。もちろん「述べて作らず」ということから、實際に經を製作してはいないものの、『春秋』に加筆し『易』の解説（十翼）を書いたのだと考えられてきた。ところが、章炳麟は、經書とは、中國の文化を後世に傳へるものだととらえて、その文化を傳承する歴史書として經は重要なのだと認識する。その中で孔子は、經を通して優れた周の文化を傳承した者として位置づけられている。つまり孔子は、眞理を説くのではなく、眞理を傳承するという意味で相對的にその地位が低くなっている。このような章炳麟の獨特の經に關する觀念はどのようなにして生じたものだろうか。

三で指摘したように、清代の漢學者は、その端緒・理想としては古い名物訓詁の研究を通して孔子の教えを再検討して、宋明學で見失われてきた教えを再發見することにあつた。しかしながら現實には戴震等の少數の例外を除いて、名物訓詁の研究が自己目的化したかのようになってしまい、孔子の教えを説くことまでに至らなくなつてしまつ

た。このような傾向は章炳麟自身の『春秋左傳讀』にも見出すことができる。二で考察したように春秋學を例にとれば、清代の漢學者は訓詁の正確な漢儒の説をとつて、その義例が『左氏傳』の内容とあわない點に注意を拂っていない。このような清代の漢學の缺點は、その誕生の時點で、清朝の文字の獄に代表される思想彈壓を受けて自由に思想を述べることができなかったことにその一因がある。しかし章炳麟が生きた時代には、清朝は崩壊寸前で思想統制ができる状態ではなかった。しかし、學者達は從來からの傾向を受け繼いだままであつたのである。章炳麟はこの漢學の傾向を自覺して、六經に説かれた義を重視すべきだと認識して、その經學を再構築した。

しかも、漢學の副産物としてもたらされた諸子學の分野では、孔子はその生きた時代には諸子の一人に過ぎないと考えるだけの資料がそろえられつつあつた。もちろん、その觀點を變えて、儒家あるいは孔子を諸子の一人と見る考え方は、康有爲と章炳麟の諸子學に始まるわけだが、そのための準備は既に成されていたわけである。章炳麟の先秦諸子に關する認識では孔子が生きた時代には諸子の一人に過ぎないのである。

また、當時中國全體が歐米列強に侵略されつつあるという苛酷な状況の中で、經學はその政治的有效性を失いつつあつた。その状況の中で經にすべての眞理の源泉を求めるわけにはいかなかった。これらの諸條件のもとで、章炳麟は經を中國文化の精髓ととらえ、孔子が果たした偉大な事業とは過去の聖人が残した文化の繼承であると考えたのである。

ただし、章炳麟の獨特の經に關する觀念が成立した原因を先に述べたような章炳麟の經學に内在する論理の徹底化という側面だけに求め

ることはできないだろう。二の2で考察したように、章炳麟の説の成立には、直接の原因を求めることはできないにしても、康有爲との關係を抜きに考えるわけにはいかない。康有爲は經はすべて孔子が古の聖人に假託して、實は孔子自ら作り上げたものであるとして、社會改革家としての孔子像を作り上げている。その中で康有爲は古文經すべては劉歆の偽作であるとして、經の信憑性に疑いを投げかけ、孔子が述べて作らなかつたという從來の經學觀を否定して、後の擬古派に大きな影響を與えた。坂出祥伸氏は、康有爲が『春秋董氏學』等の著書で、口傳によつて孔子の教えすなわち微言大義が傳つたことを強調することを指摘している。微言大義の口傳は康有爲の三世説の理論的な根據なのであるが、漢代になつて初めて文獻に現われた微言大義の文獻傳承の上での弱點を正當化するという側面があるのである。また、坂出氏によれば孔子の改制の主張は康有爲が一士大夫として政治改革を提案する根據となると、政治的な意味も含まれていた。政治的に康有爲の立憲君主制の主張と對立する種族革命を主張する章炳麟にとつて、この論理に反駁することは、經學のみならず、政治的にも必要であつた。章炳麟が周の文化の繼承者として孔子を重要視することは、康有爲の託古改制の主張の對局にある。つまり、章炳麟は康有爲に對抗する孔子像を作り上げているのである。

このように後期の章炳麟の春秋學は、經に説かれた義を重要視する考えの徹底であると同時に、康有爲らとの對決の過程を経て生じた孔子像による春秋學の再檢討の結果なのである。

歷史上、章炳麟が生きた時代は辛亥革命をはさむ中國の大變動期であつた。思想史の上からも、經書に記載された事柄を無前提に信じていた時代から、顧頡剛・錢玄同らの古史辯學派を中心とする擬古派、

それに對抗する信古派の論争等、經書の信憑性を検討した上で議論がなされるようになってくる。その思想史上の變化の中で康有爲と共に章炳麟は過渡的な存在であつたと言えよう。

本稿では經學それも主に春秋學を中心としたものを考察してきただけであるから、次のようなことが課題として残される。本稿で考察した經に對する考えかたが、すべての經に對して妥當なのかどうかを考察するのが第一である。次に章炳麟の歴史に對する意識は、獨自のものがあるようなので、特に章學誠の六經皆史説との關わりで考えることが第二である。最後に章炳麟の哲學の中でどのような位置に占めるか、特にかなり關係が深いであろうと豫想される諸子學との關係がどうであるかを考えることが第三である。以上のことを課題としておきたい。

注(1) 章炳麟の經學に關する研究は島田虔次「章炳麟について」(『中國革命の先驅者たち』筑摩書房一九六五年所收)、同「辛亥革命期の孔子問題」

『辛亥革命の研究』筑摩書房一九七八年所收、王汎森「章太炎的思想一八六八—一九一九」及其儒學傳統的衝擊(『臺北時報文化出版一九八五年』第三章「與清末今古文之論争」等がある。

(2) なお本稿で觸れる著作年代等の年代の考證は特にことわりのない限り湯志鈞「章太炎年譜長編」(北京中華書局一九七九年)によつた。

また、本稿で引用する章炳麟の著作は特に注記しない限り上海人民出版社刊章太炎全集(以下全集と略稱する)によつた。現存章太炎全集は第六冊までが出版されているが、各冊の出版年次は以下の通りである。第一冊一九八二年、第二冊一九八二年、第三冊一九八四年、第四冊一九八五年、第五冊一九八五年、第六冊一九八六年。

(3) 『自述學術次第』(手抄本一九一三年前掲『章太炎年譜長編』より引

用)

先師魯君、曩日談論之暇、頗右公羊。

(4) 前掲『自述學術次第』

余治經專尚古文、非獨齊・魯、雖景伯・康成亦不能阿好也。

(5) 『小學略說』『章氏國學講習會講演記錄』第一・二期(一九三五年)筆者
は高雄復文書局「國學略說」(一九八四年)を用いた。
原文は「學者有志治經、不可不明故訓。」

(6) 前掲『自述學術次第』

余初治左氏、偏重漢師、亦頗傍采公羊。以爲元凱拘滯、不如劉賈闊
通。數年以來、知釋例必依杜氏、古字古言則漢師尙焉。

(7) 『太炎文錄續編』全集(五) 卷一「漢學論」下

余少時治左氏春秋、頗主劉賈許頴以排杜氏、卒之襄施攻伐、杜之守猶
完、而爲劉賈許頴者自敗。晚歲爲春秋左氏疑義答問、頗右杜氏、於經義
始條達矣。

(8) 『春秋左氏疑義答問』全集(六) 卷五 黃侃後跋

孔子作春秋。因魯史舊文而有所治定。其治定未盡者、專付丘明、使爲
之傳。傳雖撰自丘明而作傳之旨悉本孔子。公書所證明者、梗概如此。不
知因舊史之說、則直以春秋爲素王之書、責之纖悉而纒繞起。不知孔子有
所治定、則云春秋不經孔子筆削、純錄魯史原文、而修經之意浪。不知作
傳之旨悉本孔子、則經違本事與褒譏損之文辭屈于時君而不得申者、竟
無匡救證明之道、其弊也、執傳則疑經、廢傳而經謬晦矣。

(9) 杜預『春秋經傳集解序』

故史之所記、必表年以首事。

(10) 『春秋左氏疑義答問』卷一

詩亡、謂厲王之時、小雅盡廢、四夷交侵、中國微也。春秋作、謂宣王
時也。其後孔子修之要在褒周室、尊方伯、攘夷狄、及諸朝會遣使之事、
略與小雅同、而不及大雅受命之端、其統亦可見矣。

章炳麟の經學に關する思想史的考察

(11) 『孟子』離婁上

詩亡然後春秋作。

(12) 『春秋左氏疑義答問』卷一

傳稱五十凡者、亦宣王之史所遺、書法政度悉依時制、非周公舊體也。

(13) 同前

周室雖有春秋、布其法式、侯國殊絕、同時不能聽錄。

(14) 同前

列國史官、皆出周太史陪屬、於其國不爲純臣。

(15) 『自述治學』『制言』第二五期

春秋本據魯史、孔子述而不作、倘亦未加一字。

(16) 孔穎達『春秋經傳集解序』正義

沈氏云『嚴氏春秋』引『觀周篇』云、「孔子將脩春秋、與左丘明乘如
周、觀書於周史、歸而脩春秋之經、丘明爲之傳、共爲表裏。」

(17) 『春秋左氏疑義答問』卷一

此則春秋經傳同作俱修、語見觀周。

ちなみにこの部分は劉師培も『左氏傳』の正統性を證明する根據と
して使用する。

(18) 『春秋左氏疑義答問』卷一

是故存其舊文於經、而付其實事於丘明以爲傳、錯行代明、使官法與事
狀不相害、所謂經傳相表裏者此也。

(19) 『史記』十二諸侯年表序

魯君子左丘明、懼弟子人人異端、各安其意、失其真、故因孔子史記具
論其語、成左氏春秋。

(20) 『孟子』滕文公下

孔子成春秋、亂臣賊子懼。

(21) 『春秋左傳讀』(全集二) 卷一「立素王之法」に引く。賈逵『春秋序』

『春秋左氏傳』孔穎達正義引く

孔子覽史記、就是非之說、立素王之法。

- (22) 『春秋左傳讀』卷一「公羊以隱公爲受命之王」

且春秋改制、孔子已親行之。

- (23) ここで指す素王とは公羊學派の言う意味で用いられているかどうかは疑問があるが、この點に關してはもう少し詳しく考察する必要があるのでは今は置いておく。たとえば、時代は降るが『煇書』原刊本「魯荀」では、素王は荀子の言う後王であるとされているし、また劉師培への書簡では義例（釋例）が「素王の新意」であるといっていることから、むしろ孔子を社會改革家とみたのではなく文化の保持者と見たと考えた方がよいのではないか。

- (24) 『後漢書』賈逵傳

鑑出左氏三十事尤審明者、斯皆君臣之正義、父子之紀綱。其餘同公羊者什有七八。

- (25) 『春秋左氏疑義答問』卷一

公羊又在其後、其所作傳、大事同於左氏者什有一二、其餘則異、義例乃盡不同、正以鐸椒采摭不盡、故二家傳以口說也。

- (26) 『春秋左氏疑義答問』卷一

素王改制、彼傳本無明文、特仲舒輩傳會成之。

- (27) 『春秋左氏疑義答問』卷一

今尋左氏凡例與諸書法、絕異於公羊言同者「什有七八」蓋劉賈諸公欲通其道、不得不以辭比傳、所作條例、遂多支離。杜氏於古字古言、不逮漢師甚遠。獨其謂「經條貫必出於傳、傳之義例總歸諸凡、推變例以正褒貶、簡二傳而去異端。」實非劉賈許穎所逮。

- (28) 『春秋左氏疑義答問』卷一 自注

昔撰劉子政左氏說、猶從賈素王立法之義、今悉不取。

- (29) 劉師培の春秋學に關しては拙稿「劉師培の春秋學」(一九八八年『中國思想史研究』十一號)を参照されたい。

- (30) 「丙午與劉光漢書」『太炎文錄』(全集四) 卷一

後復抽繹侍中所奏、有云左氏同公羊者、什有七八。乃知左氏初行、學者不得其例、故傳會公羊、以就其說、……征南……不復雜引二傳、則後儒之勝於先師者也。然以是爲周公舊典、抑又失其義趣。其間固有史官成法、如赴告諸例、是也。自效而外、大抵素王新意。

- (31) 「答章太炎論左傳書」『左盦外集』卷十六 劉申叔先生遺書(一九七五年臺北華世書局) 第三冊所收

左傳所言俱係周禮、不必以公羊改制之說附會左傳、以淆其家法。賈君春秋左傳序首言立孔子素王之法、即係誤采二家之說。實則素王之說出於緯書。

- (32) 前掲書(注1參照) 第六章第一節及び第二節

- (33) 鎌田正『左傳の成立と其の展開』(一九六三年大修館書店) 第二編

- (34) 注6參照

- (35) 前掲『章太炎先生國學講演錄』「經學略說」

周代詩書禮樂皆官書。春秋史官所掌、易藏大卜、亦官書。

- (36) 六經皆史説は、章學誠が漢書藝文志をもとに考えた學説として著名である。章炳麟の六經皆史説も章學誠に影響を受けたことは間違いない。しかし、章炳麟は章學誠の六經皆史説をそのまま用いたのではないようである。

章學誠に對する評價もまた、章炳麟の中で變化している。まず最初は「致吳君遂書九」(一九〇二年・章太炎年譜長編所收)や「與人論國學書」(一九〇八年)『太炎文錄』別錄卷二(全集四所收)では章炳麟は章學誠の歴史學を批判している。

しかし、『煇書』(重訂本、一九〇四年)と『檢論』の「清儒」には「六藝は史なり」の語が見え、章學誠を劉歆・班固の再來と評價しており、一九三三年の講演「歴史之重要」では、「經と史と關係至つて深し、章實齋の『六經皆史』と云ふは、此の言是なり」(原文、經與史關係至

深、章實齋云六經皆史、此言是也」と六經皆史説を肯定している。ただしこのことから、直ちに章炳麟が章學誠の説に賛同したと言うことはできない、それはその他の著作には章學誠への言及は見られず、特に、『國學略説』で六經皆史の語を多用しながら、章學誠に言及しないのは、章學誠に完全には賛同していないからではないかという疑いがあるからである。つまり、章學誠のことを、黄侃が「春秋左氏疑義答問」で指摘する、六經を單なる歴史的資料だとする見方をする者だと考えている可能性はある。章學誠自身が六經を單なる歴史的資料だと考えていたかどうかは別として、そのように章炳麟が誤解していた可能性があるのである。章炳麟の言う「六經は皆史なり」という言葉は、漢書藝文志が國語や史記等の後の史部にあたる書物を經部に入れたことを評價していることでわかるように、六經を單なる歴史的資料として見るのではなく、六經が聖人の教えを保存するという點で重要であると考える點にその力點がある。

(37) 同前

六經之名、孰定之耶。曰孔子耳。孔子之前、詩書禮樂已備。學校教授、即此四種。孔子教人、亦曰「興於詩、立於禮、成於樂」又曰「詩書執禮、皆雅言也。」可見詩書禮樂、乃周代通行之課本也。至於春秋、國史祕書、非可公布。易爲卜筮之書、事異恆常、非當務之急。故均不以教人。自孔子贊周易、修春秋、然後易與春秋同列六經。以是知六經之名、定於孔子也。

(38) 同前

漢人治經、有古文・今文二派。伏生時緯書未出、尙無怪誕之言。至東漢時、則今文家多附會緯書者矣。古文家信歷史而不信緯書。史部入經、乃古文家之主張。緯書入經、則今文家之主張也。古文家間引緯書。則非純古文學、鄭康成一流是也。

(39) 同前

章炳麟の經學に關する思想史的考察

清人治經、以漢學爲名。其實漢學有古文・今文之別。信今文則非、守古文即是。三國時漸知尊信古文。故魏晉兩代、說經之作、雖精到不及漢儒、論其大體、實後勝於前。故漢學二字、不足爲治經之正軌。昔高郵王氏、稱其父「熟於漢學之門徑、而不囿於漢學之藩籬。」此但就訓詁言耳。其實論事跡・論義理、均當如是。魏晉人說經之作、豈可廢哉。

(40) 章炳麟は甲骨文や金石文等の出土資料を認めず、羅振玉に反駁した。この出土資料を緯書と同一視して否定することも、出土資料が傳承された資料ではないからではないか。

(41) 坂出祥伸『中國近代の思想と科學』(一九三八年同朋社)第二章「變法運動の思想」

(42) 同前